

シャダーク航海日誌

第1級帝国商艦

テネブレ 133年、グリフィンの日、10日

護衛艦船、海賊船追撃のため旋回し、本艦を離れる。1時間以内に本艦に会流の予定。
風魔法官より、憂慮すべき報告あり。風向制御の呪文が効力を失ったとのこと。それにより、
本艦は、帆走不能の状態に陥る。風魔法官は、すでに、いかなる呪文も使用不可能になった
とのこと。

奴隷長に糧航行を命ず。しかし、速力上がらず。

正午

護衛艦、会流せず。護衛艦も本艦同様、帆走不能の状態と推測せり。奴隷長の尽力
にもかかわらず、潮流強く、本艦は航路を外れ北に流される。
風魔法官、体調思わしくなく、船室にて休養を命ず。

テネブレ 133年、グリフィンの日、11日

本艦、夜を通して漂流す。

護衛艦は、今後も会流の見通しなしと見なす。海賊の奇襲に備え、全艦に戦闘準備を
命ず。護衛兵の3分の1を、常に戦闘配置につける。

奴隷の疲労、極限に達す。数時間潜ぎ続けると、強い潮流に逆らい積載物満載の本艦
を航行させるは、困難至極なり。これ以上の労働は、奴隷の生命に危険が及ぶと判断し、
奴隷に休息を命ず。

風魔法官、いまだ船官より現われず。昨日より、一切の食事をとっていないとの報告を受ける。
重病と判断す。本日も漂流を続ける。

テネブレ 133年、グリフィンの日、12日

又晩月の漂流。潮は波もなく、本艦を北へ流し続ける。すでに、海図に記された範囲を越
える。

舵手と言葉を交わす。舵手も、このような潮流は初めてとのこと。

乗組員に疲労が増す。この事態はすべて、風魔法官が呪われたためとの流言を聞く。乗組員
の精神状態が懸念される。幸い、乗客に僧侶あり。かかる迷信的流言を一笑す。乗組員

に、多少なりとも安堵感を与えたものと期待する。

正午

風魔法官を船室に見舞う。風魔法官、泥酔状態にあり。しかし、精神状態は幾分落ち着いた模様。この日も、懸念したとおり、風はなく、したすら北へ流れ終わる。

テネブレ 133年、グリフィンの月、13日

我々は、神の玩具として、もてあそばれているのであろうか。護衛所監も、同じ魔法もない。あるのはただ、このいまいまい潮月のみ。

全身全霊を込めて本艦を漕ぐよう、奴隷に命ず。いなかばすか、この終わりのなき潮流からの脱出に賭ける。

8時間、最高ピッチで本艦を漕ぎ続けるものの、過労のため奴隷の死亡者が続出。状況を悪化せしめたことを悔む。

糧走の中止を命ず。これ以上の生命を、無為に失うことは、本艦にとって大きな損害となる故なり。今後は、潮月に艦を任せ他はない。無駄な努力は、ただ消耗を促すのみ。

風魔法官と会食す。風魔法官の精神状態は、かなり持ち直したものの、魔力は依然消失したままとのこと。乗客に含まれる、各界の魔法使いたちも、同様に魔力を失っていたとの事実を、風魔法官より聞く。

風魔法官は、魔法の嵐に捕えられたのではないかとこのことを意見を述べる。彼が、かかる否定的憶測に畏縮せるを見て、私は彼を解任す。この措置が、彼を落胆させ、一層否定的考えに走らせることになるならば、その時は、また策を考えることとする。ともあれ、強く前向きな精神を保持する者、本艦における任務には不適任と確信するものなり。

漂流続く。

テネブレ 133年、グリフィンの月、14日

漂流の速度衰えず。

午前11時数分前、左舷にフーセン発見との報告あり。乗組員は一同に緊張せり。警戒態勢を命じ、投石機と対艦爆薬の使用を許可す。

怪物は数秒間、4エリ、巨大な背に日光を反射し、本艦に近づき、一は長さを90

メートル。鱗には角状の突起あり。ときおり、我々を監視するかのごとく、巨大な頭部を海上に
もたげる。口を開くたび、歯の雷鳴のとき音を立てる。その醜悪なる口部を見て、嘔吐す
る船員数名あり。

事態は深刻を極める。艦は潮に流されるまま身動きがとれず、300名の兵士、ある者は銃や
クロスボウで武装し、あるものは重兵器の傍らに立ち、艦に沿って泳ぐ巨大な怪物と対峙す。
怪物は、ただ泳ぐのみ。本艦に攻撃の意図はいまだ見られず。

午後5時、怪物は海上に頭を突き出し吠える。10分後、もんどり打って海中に没す。怪物
は、空高く水しぶきをあげ、深海の中間の元へ帰還したかと思われた。

その後1時間、攻撃態勢を維持するも、しはや危険ないと判断し、それを解除す。

怪物はシャドーフの巨体を脅威に感じ、しばらく様子を伺いしものと推測す。もし攻撃を受け
しければ、致命的損害もやむなきところ。

かかる異常事態においでし、我が乗組員及び護衛兵士は、それぞれの任務を勇敢に果たしたと、
賞賛に値す。

テネブレ 133年、グリフィンの月、15日

早朝、見張り員を帆げたに吊るす。この者の職務怠慢により、本艦は座礁せり。よって、罰を与えたものなり。座礁時の衝撃で、私は寝台から投げ出された。さっそく高級航海士を召集。緊急会議を開く。本艦が座礁したのは島、海図になさものに、その存在を知る者なし。幸い、艦の損傷は軽度にて、数日の作業にて修復せむとの見通しあり。ともあれ、陸に到着したること、船員にはこの上なき喜びなり。

新鮮な飲料水確保のため、3艘のカッターを上陸させる。風魔法官も上陸隊に同行す。

私は、艦の修復に費やされる数日間を利用した島の探索を提案す。

上陸隊、上質なる水を汲んで帰還す。湾には風雨に浸食された形跡がなく、まるで昨日出来上がった島であるかのような様子。風魔法官、大変に興奮し報告す。馬鹿げている。この男に対する私の不信は、さらに深いものとなる。魔法の力を失いしことが、彼の知性までも低下せしめたかと判断す。

ともあれ、漂流は終わった。我々は助かったのである。

テネブレ 133年、グリフィンの月、16日

兵士250名と乗組員20名から探検隊を組織す。乗客20名の有志からなる隊と結成されるも、乗客の隊に与える使命が思い当らず、困惑す。乗客隊は、騎士十数名、僧侶1名、魔法使い、2名の編成。魔法使いは、風魔法官同様、魔法の力を失っている。

全人員、装備、馬の上陸には2時間を費やす。出発から10分後、小さな川を越える。

私は、この探検に少なからず興奮を覚えたり。もしや我々は、新大陸の発見者なのかと知れぬ。もしそうであれば、皇帝陛下が、この新世界の統治者として、私を任命されることも夢にあらず。広大な平原に出る。豊かな緑におおわれたる所なり。しかし、その植物は、隊の誰もが見たことのない未知の種類ばかりであった。上陸からここに至る間、我々はいかなる人間にも会わず。無人島である可能性、大なり。

遭遇した動物たちも変わっていた。鱗におおわれたり型の生物や、巨大な鳥。大型の動物が、しばしば我々を観察した後に逃走するとの報告もあり。これだけの島なら、様々な猛獣が棲めるも自然の理なり。

日没、野営の準備にかかる。危険な動物を避けるため、灯火にてキャンプを取り囲む。この地域の樹木は、樹脂分を多く含む。よく燃える。

兵士のひとり、非常に興味深い事実を発見す。樹木の断面に、普通ならあるはずの年輪が見当たらず。まさに未発見の新種なり。

夜の気温は低く、肌を刺す。シャドーフが数日間、北へ流されてることを考慮すれば、当然のことなり。空は晴れ、星、多し。私の興奮は、続いていた。しかし、少々疲労蓄積の感あり。星座が動いて見える。

テネブレ 133年、グリフィンの月、17日

深夜、悲鳴を聞く。2名の兵士が行方不明とわかる。翼のある巨大生物が、2名をさらったとの目撃者の報告あり。歩哨を倍に増やす。

その後、夜は何事もなく過ぎる。

午前9時、出発。さらに北へ進む。

夕方までに、かなりの距離を進むことができた。途中、不幸な事故あり。5名の隊員が食肉性巨大植物の餌食となる。私はずっと、何者かに空から見られているような気がしてならない。2名の魔法使いも、私同様の感覚を覚えたとのこと。彼らは最終、空を観察せり。私も観察すも、何もしない。

けれど、ここはすばらしい土地なり。奇妙な動植物のためのみに存在するには、人類にとりて大いなる損失なり。誉高き帝国の領土とするにふさわしい、美しく肥沃な土地なり。水も澄み豊富で、味は極めて良好。ただし、僧侶から私に、持参した食糧以外は口にすべからずとの忠告あり。土地の果物を食して倒れし者、数名ありとのこと。

私は僧侶に忠告を感謝し、就寝の準備にかかる。今夜は、剣を抱いて寝ることにする。

テネブレ 133年、グリフィンの月、18日

またも、激しい悲鳴に目を覚ます。私は剣を抜き、声の方へ駆けつけた。なんということか。兵士用テントのひとりが、中々哀れな兵士もろとも無残に引き裂かれ、押し潰された。体の一部分を持ち去られ兵士もあり。歩哨隊長の報告では、死亡または行方不明は2名にのぼるとのこと。

その後の捜索で、地面に無数の足跡が発見される。かなり巨大な生物の仕業であると推測される。騎士たちは大変に興奮し、いかにもその生物の首をとり、かたきを討たんと息を荒くせり。私は何も言わず、テントに引き返す。

朝、僧侶がひとり、行方不明になったとの報告を受ける。他の僧侶によると、彼は夜どおし星を観察していた。故、怪物に狙われたのであろうとのこと。騎士たちは地団駄を踏み悔しがった。彼らも夜を徹して警戒に当たりし、まったく役に立たざるためなり。

今日、我々は初めて、敵を目の当たりにす。狂暴かつ巨大なる翼竜なり。兵士のひとりが、ハゴヒにクロスボウにて射落としたもの。

大きな谷に出る。そこで見たものは、畑と、たわわに実り穀物なり。我が夢破れる。結局ここは、無人の島にあらず。しかし、魔法使いによると、穀物は見たことのない種類であるとのこと。遠くに村あり。そちらに向かう。

村は人影なし。我々の侵入に驚き、慌てていず、かに非難した後であろうか。かまどに残り火を確認す。

村よりさらに向う、立派な城状の建造物あり。とにかく、あそこまで行けば、誰かに会えるものと期待する。